

## 学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

**Adverse oncologic outcomes of adenocarcinoma of the anal canal  
in patients with Crohn's disease**  
( クロウン病関連肛門管癌の検討 )

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

下部消化管外科学 (指導教授 池田 正孝)

氏 名 安原 美千子

【背景】 クロウン病は高頻度に肛門病変を伴い、肛門管腺癌の発生母地となるが、その腫瘍学的成績については十分に検討されていない。本検討では、当院で経験した肛門管腺癌を後方視的に検討し、クロウン病関連肛門管腺癌の腫瘍学的特徴を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】 1998 年から 2018 年までに当院で肛門管腺癌と診断、根治手術を施行した 102 例を対象とした。対象症例をクロウン病関連群 (以下 CA) とクロウン病非関連群 (以下 N-CA) に分類し、患者背景、病期分類、手術術式、周術期治療、病理組織結果、再発形式について後方視的に検討し、局所無再発生存率 (以下 LFS)、無再発生存率 (以下 DFS)、全生存率 (以下 OS) のリスク因子を抽出し、さらに clinical T (以下 cT) ごとに腫瘍学的成績を検討した。

【結果】 CA 群は N-CA 群と比較して若年発症 (median age:45 vs. 62 years,  $p < 0.001$ ) で管外型の割合が高く (61.8% vs. 5.9%,  $p < 0.001$ )、腫瘍径が大きかった (cT1,2;tumor size  $< 5$ cm/cT3,4;tumor size  $\geq 5$  cm: 10/24 vs. 41/27,  $p < 0.01$ )。Cox regression analysis で cT (cT3,4 vs cT1,2) は LFS (HR;3.49, 95%CI; 1.03-12.2,  $p = 0.04$ )、DFS (HR;2.82, 95%CI;1.29-6.45,  $p = 0.008$ )、OS (HR;2.92, 95%CI;1.34-6.94,  $p = 0.006$ ) の、クロウン病関連/非関連は LFS (HR;2.29, 95%CI; 1.01-5.71,  $p = 0.04$ )、OS (HR;2.86, 95%CI;1.58-7.15,  $p = 0.04$ ) の独立した危険因子として抽出された。そこで、cT ごとに腫瘍学的成績を検討すると、cT1,2 では、CA 群、N-CA 群間で有意差を認めなかった (5 年 LFS; 79.2% vs. 87.8%,  $p = 0.09$ 、DFS; 74.1% vs. 71.3%,  $p = 0.58$ 、OS; 91.0% vs. 85.7%,  $p = 0.23$ )。しかし cT3,4 では、CA 群の予後は N-CA 群と比較して有意に予後不良であった (5 年 LFS; 32.5% vs. 70.4%,  $p = 0.001$ 、DFS; 15.9% vs. 40.7%,  $p = 0.04$ 、OS; 25.8% vs. 71.0%,  $p = 0.007$ )。

【結論】 肛門管腺癌の腫瘍学的成績に影響を与える因子として、cT とクロウン病関連の有無が抽出された。とくに cT3,4 クロウン病関連肛門管腺癌の腫瘍学的成績は極めて予後不良であった。クロウン病関連肛門管腺癌は、経皮的組織検査を含めた術前検査による正診率の低さを念頭におき、クロウン病の肛門病変の surveillance を積極的に行うことが大切である。そのため、確定診断が得られる前であっても、発癌が疑われる際には、外科的根治切除を 1 つの選択肢として考慮すべきである。